声と文（ふみ）

― 統合失調症を患う母と暮らす10代の「私」の日常誌 ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
松岡　園子

ここに，10代の「私」の声がある。「私」は，これまで統合失調症を患う母と暮らし，生きてきた。その過程でさまざまな声を聞き，自身も声を発してきた。そうした子どもの声について外側から語られることはあっても，子ども自身が自ら語ることは少ない。

本研究では当事者である「私」が，自身の体験を自己エスノグラフィにおいて記述し，統合失調症を患う人や，その子どもも含めて地域で「ともに生きる」ことについて社会・文化的側面から論考した。その際，手許に残されている日記や手紙に書かれた言葉の一部を〈声〉として本論文中に引用した。また日記は〈文〉としての役割を持つものでもあった。

「私」は，12歳で祖母が他界し母と2人暮らしになった際，周囲の取り計らいにより児童養護施設へ入所した。母は精神科病院への入院が検討されていた。しかしその決定に納得がいかず，「私」は元の家で母と2人で暮らすことを選択した。

当時の社会的文脈から考えるとそれは，関係者にとってハイリスクな選択決定であったが，12歳の「私」は，十分な意思の疎通を図ることができない母と2人で生活を始めた。その後，中学卒業後に就職し経済面での安定を図ると同時に定時制高校へ進学し，自力で生きるために学ぶ術を身につけた。そして周囲の人々の支えにより地域で生き，母の回復を見届けてくることができた。その過程には，〈声〉と〈文〉を通じた相互的・対話的な対話が存在していたといえる。